

在宅で高齢者を介護する介護者からみた介護支援者とその支援

松浦 治代・宮脇美保子

Haruyo MATSUURA and Mihoko MIYAWAKI

Study of ideal support to domestic caregivers who take care of elderly persons

1986年、「高齢者保健福祉推進10カ年戦略」が策定され、高齢者が家族や知人に囲まれて地域で住み続けられるよう、さまざまな在宅ケアの体系を強化する方策が打ち出された。そのなかで、訪問看護、ホームヘルプサービス、デイケア、デイサービスなどの医療福祉サービスの充実が図られるようになってきた。しかし、現実には、現在も高齢者の介護は家族の介護力に依存しているところが大きい。

こうした家族の介護の負担は肉体的なものだけでなく、精神的なもの大きいといわれる¹⁾。また、平成7年国民生活基礎調査の結果から、生活意識については要介護者のいる世帯は「大変苦しい」、「やや苦しい」とする割合が43.3%と、全世帯の42%と比較してやや多い傾向にあること、そして収入が同居の介護者のストレスの原因としてもあげられ、経済的な問題についても考える必要がある。このような現状を踏まえると、家族介護者に対する何らかの支援が必要であろう。そのためには、実質的な介護の補助といった身体的な負担の軽減だけでなく、精神的、経済的支援のあり方も考えていく必要がある。

そこで、今回はアンケート調査をもとに、在宅で高齢者を介護する家族介護者への支援に注目した。家族介護者の視点からみた、支援者とその支援内容について調査し、考察した。

対象および方法

1 用語の定義

1) 要介護者：在宅で家族の介護を受けながら生活している高齢者で、i) 訪問看護サービス、あるいは、ii) デイサービスを利用している者。

2) 介護者：要介護者とともに生活している家族構成員の中で、主に介護している者。

3) 支援者：主たる介護者からみて、自分を支えて

くれると思える者。

2 対象：在宅で高齢者を介護し、鳥取県米子市内の訪問看護サービスあるいはデイケアサービスを利用した介護者、71例のうち有効回答とした62例。

3 調査期間：1997年9月から10月の2カ月間。

4 調査内容：介護をする上で、自分を支えてくれていると思う人を、1) 同居家族、2) それ以外、に分け、

1) については、i) 介護支援が得られているか、ii) 自分にとって精神的支えになってくれているか否か。

2) については、i) 支援者として、思い浮かぶ順に、思いつくだけの人をあげてもらい、ii) それぞれに、どのような支援を受けていると思うか、経済的支援、介護支援、精神的支援に分けて、その内容を記述してもらった。

5 調査方法：調査用紙を、訪問看護時あるいはデイケアサービスの送迎時に対象者に直接手渡し、同意を得た上で回答のあったもののみ、次回の訪問時あるいは送迎時に回収した。

結 果

1 対象集団の特性

1) 要介護者について

要介護者の平均年齢は82.5±6.6歳(58歳から94歳)であった。性別は、女性が47例(75.8%)あり、男性13例(21.0%)、無回答5例(8.0%)であった。痴呆症状があり、日常生活に何らかの支障があるとするものは12例(19.0%)であった。

2) 介護者について

i) 介護者の平均年齢は54.5±12.4歳(22歳から95歳)であった。性別でみると女性51例(82.2%)、男性6例(9.7%)、無回答5例(8.0%)であり、女性が

全体の8割以上を占めていた。

ii) 要介護者からみた介護者の続柄は、配偶者は8例(12.9%)、義理の関係を含む子は49例(79.0%)であった。

3) 介護期間の平均は4.8±4.7年で、0.5ヵ月から26年の幅があった。

4) 在宅で介護することになった理由(複数回答)として最も多かったものは「家で介護してあげたかった」、という介護者の思い28例(45.2%)であり、次いで「要介護者である本人の希望」23例(37.1%)であった。その他「退院したから」という制度の問題を理由にあげるものが19例(30.6%)あった。

5) 介護者になった理由(複数回答)については、「家族として引き受けざるを得ない」が34例(54.8%)と最も多く、次いで「他にいないので仕方ない」とするものが22例(35.5%)あった。逆に、自分から希望したものは14例(22.6%)であった。

6) 介護者と要介護者を除く同居家族の数は平均2.3±1.6人で、介護者と要介護者のみの世帯は5例(8.0%)であった。

2 介護者を支える支援者の範囲

1) 同居家族について

i) 同居家族で、介護を支援してくれる人の平均は1.6±1.4人、精神的支えになっている人の平均は1.9±1.5人であった。同居家族構成員の介護支援の程度については、要介護者を除く家族全員で介護している世帯は28例(51.9%)であった。そして、家族全員が精神的な支えになっていると答えた者は36例(68.0%)であった(図1)。

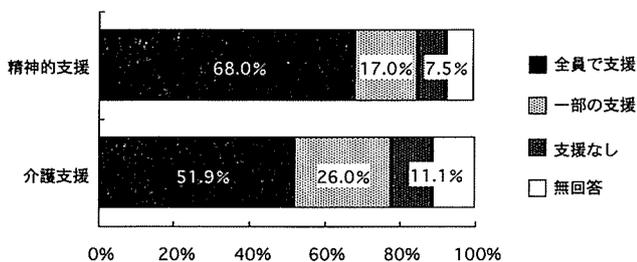


図1. 同居家族による支援

また、ここでの興味深い結果として、要介護者が介護に協力してくれるとするものが18例(29.0%)、精神的支えになるとするものが20例(32.2%)あった。介護者は、要介護者が介護の対象であると同時に支援

者にもなると捉えていた。

ii) 介護者と支援者との関係

介護者が、同居家族としてあげた者のうち要介護者を除く全数と支援の有無を表1に示した。続柄は介護者からみたものを示す。

実数は夫35名、息子31名、実の娘25名の順に多かった。これら家族のうち、夫の24名(68.6%)が介護支援を、28名(80.0%)が精神的支援をしていた。また、実娘の80.0%が介護支援を、88.0%が精神的な支援をしており、嫁(義理の娘)は100%が精神的にも介護でも支援になるとされていた。

全体としては、介護支援者として87名(70.2%)が、精神的支援者としては103名(83.0%)があげられ、介護支援よりも精神的支援の方が、支援の率が高かった。

また、支援者を年齢別にみると、介護者には、1歳でも精神的支援者になるとしてあげる者があり、多くの者が、7歳以上になると介護の支援者になるとしていた(図2)。

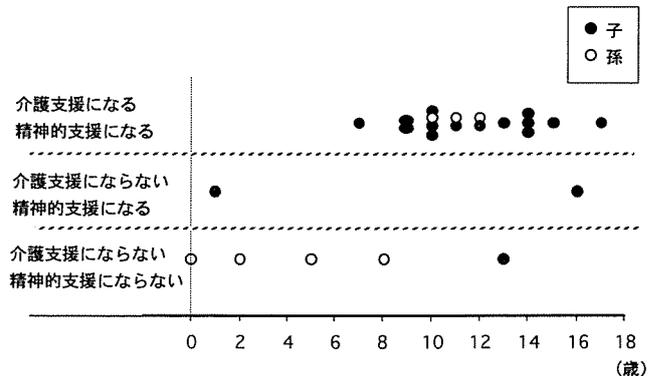


図2. 支援と年齢・続柄の関係

2) 同居家族以外の支援者とその支援

i) 同居家族以外の支援者

全体として、介護者は平均1.7±1.5人の同居家族以外の支援者をあげていた。この中には同居家族以外に支援者は「いない」とするもの12例(19.3%)が含まれていた。

介護者のうち、経済的支援を受けている者は5例(8.0%)で、介護支援については21例(33.9%)であり、精神的支援を受けているとする者は41例(66.1%)であった。

同居家族以外の介護者として、親族の他に友人・知人、病院あるいは訪問看護・デイケアサービスなどの医療・福祉の関係者などがあげられた。

表1. 介護者から見た同居家族の続柄と支援の有無

続柄	人数	介護支援 人数 (%)		精神的支援 人数 (%)		無回答 (%)
		支援がある	支援がない	支援がある	支援がない	
夫	35	24 (68.6)	11 (31.4)	28 (80.0)	7 (20.0)	0 (0)
妻	2	2 (100)	0 (0)	2 (100)	0 (0)	0 (0)
息子 (複数)	31	20 (64.5)	10 (32.2)	24 (77.4)	6 (19.3)	1 (3.2)
娘 (複数)	25	20 (80.0)	4 (16.0)	22 (88.0)	2 (8.0)	1 (4.0)
嫁	6	6 (100)	0 (0)	6 (100)	0 (0)	0 (0)
婿	1	1 (100)	0 (0)	1 (100)	0 (0)	0 (0)
父	2	2 (100)	0 (0)	2 (100)	0 (0)	0 (0)
母	2	1 (50.0)	1 (50.0)	2 (100)	0 (0)	0 (0)
義父母	2	0 (0)	2 (100)	2 (100)	0 (0)	0 (0)
祖父母	2	2 (100)	0 (0)	2 (100)	0 (0)	0 (0)
姉妹	2	2 (100)	0 (0)	2 (100)	0 (0)	0 (0)
兄弟	2	1 (50.0)	1 (50.0)	2 (100)	0 (0)	0 (0)
孫 (複数)	12	6 (50.0)	6 (50.0)	8 (66.7)	4 (33.3)	0 (0)
合計	124	87 (70.2)	35 (28.2)	103 (83.0)	19 (15.3)	2 (1.6)

ii) 同居家族以外の支援者の支援範囲

上記の支援者の支援内容をみると、介護者は、義理の関係を含む兄弟姉妹からのみ経済的支援を受けていた。介護支援は主に親族と福祉、医療の専門職者から受けており、友人・知人からの支援内容は主に精神的なものであった (表2)。

表2. 同居家族以外の支援者と支援の分類 (複数回答)

続柄	支援の種類 (例数)		
	経済的支援	介護支援	精神的支援
母		2	4
父			1
義母			1
娘		3	6
息子		1	5
嫁 (義娘)		1	
姉妹	1	4	12
兄弟	3	1	3
義姉妹	1	8	8
義兄弟			2
叔母		2	2
義叔母			1
孫		1	1
いとこ			1
友人・知人		2	8
隣人			1
訪問看護婦		5	4
往診医師		1	
保健婦		1	1
ヘルパー		1	
デイケア職員		2	
病院看護婦		1	1
合計	5	36	62

し) 同居家族以外の支援者の支援内容について
経済的支援については回答がなかった。

介護支援は、「休日」や「介護者の用事のある時」に交替してくれるなど、介護者を介護から解放するための支援と、「介護者にはできない専門的なことをしてくれる」など、訪問看護婦などの専門技術を要するもの、要介護者の介護以外の「家事」などの側面的支援があげられていた。

精神的支援としては、「聞いてもらえる」、「理解してくれる」、「励ましてくれる」などがあげられた。実際に介護の手助けをしてくれるわけではないが、「介護の大変さをわかってくれる」、「理解してくれる」ということを、支援と捉えているものが複数あった。

また、友人・知人のなかには、介護をしている者同士の励まし合いや情報交換など、介護を通じてのつながりを支えとするものがあつた (表3)。

表3. 同居家族以外からの支援内容

	支援の内容
経済的支援	
実質的な介護支援	(1) 実際の介護支援 補助的に助けてくれる 休みの日に介護してくれる 用事のある時に預かってくれる 留守の時に世話をしてくれる (専門職者に) 自分ができないことをしてもらう (3) 介護以外の家事 食事の世話を快くしてくれる 洗濯してくれる
精神的支援	(1) 聞いてくれる 会話 電話で話を聞いてくれる 愚痴を聞いてくれる ストレスが溜まった時に相手になってくれる 相談相手 アドバイスをしてもらう 生き方全般の指導者 一緒に考えてくれる (2) 励ましてくれる 互いに在宅で介護しているので励ましあっている (同時期に入院していた人と) 同じ話しを共有できる、情報交換できる (3) よき理解者 気持ち (介護の大変さ) を理解してくれる (4) 差し入れ (食べ物・物) してくれる

考 察

以上の結果から、介護者に対する支援者のあり方と支援内容について考察する。

1 同居家族の介護支援者の範囲について

厚生省の調査²⁾によると寝たきり老人の介護者は85.9%が女性であり、また、続柄としては配偶者27.9%、義理の関係を含む子62.8%である。今回の調査結果においても、介護者の83.9%が女性であり、要介護者から見た続柄としては息子の配偶者 (嫁) が多かった。そして、その支援者として、介護者の夫、息子、娘が多くあげられていた。

介護者に女性が多いことについては、「介護は女性の仕事」、「女性が適役」といった社会の性別役割期待の影響と考えられる。春日³⁾は、嫁、娘といった女性が介護するのは当たり前という認識があり、逆に息子等男性が介護を選択した場合には、「自分は仕事をして、自分の妻に介護させる」という性別役割を果たせない男性社会の「おちこぼれ」にされてしまう現状を指摘している。しかし、このように女性が介護することを「当たり前」と、みることはできない。女性であ

れ男性であれ、本人が望み、あるいは納得した上で介護者に「なる」、あるいは「ならない」という選択がなされればいいが、社会的な圧力によって、役割を強制されることは問題であろう。

さらに、納得した上での介護者であったとしても、それが一人への過度な負担にならないよう考えていく必要がある。渡辺ら⁴⁾は家族成員間の介護労働の分散化は介護負担感の軽減と家族の絆の強化の二つの意味があると分析し、その介護労働の分散化の影響因子の一つに「認識」をあげている。今回の調査で、介護者は、介護者は小学生程度の子供でも介護の支援をしていると受けとめており、年少者であっても精神的支えになるとしていた。全ての家族構成員が同じ支援をすることはできないだろう。しかし、「子どもだから」、「男だから」、「仕事があるから」できない、と決めつけるのではなく、それぞれの能力に応じて家族全員で介護をしていく方向を考えることが重要であると思われる。

次に、同居家族以外の支援者について述べる。介護者は、一般に家族と考えられる親・子・兄弟といった親類の他に、友人・知人、隣人などを支援者としてあげていた。これは、親族の範囲を越え、地域で介護支援を行っていくことの可能性を示すものであると考える。今後、さらに高齢化が進む中、同居家族だけでの介護は限界がある。同じ悩みを持つ介護者間の連携、近隣等身近なレベルでの値域のネットワーク作りが必要となると考える。

2 支援の内容について

1) 経済的支援は義理の関係を含む兄弟姉妹に限定されていた。しかし、上野⁵⁾は、各種年金等制度の充実、配偶者相続分の増加等により、高齢者が経済的に自立してきたことから老親扶養をめぐる民事紛争は、兄弟姉妹間の感情的葛藤を調整し扶養負担の公平を求めるものになってきているとしている。この経済的支援には、兄弟姉妹同等の扶養義務者という立場にありながら実際には介護しない者から介護者への負担分散、報酬といった意味もあるのではないかと考える。さらに、将来、有償の介護サービスが充実していくと、サービスを購入することができ、支援者とは距離的に離れていても可能な、介護の負担分散化の一方法になると考えられる。

2) 精神的支援については、鈴木⁶⁾が、介護者が介護から受ける肯定的影響の内容として、「精神的支え

となる存在の重要性の理解」をあげているように、本研究でも、介護を続けていくうえでの精神的支援の重要性が示唆された。

今回は、同居家族からの支援の内容については検討していないが、同居家族以外の人々から受ける支援の内容をみると介護支援については、専門職による「自分のできないことをしてくれる」こと以外は、「用事がある時に」、「補助的に」といった支援が多かった。これは介護者が日常行っている介護からみればわずかな支援でしかないように思われる。しかし、介護者が「いざというときには支援がある、助けてもらえる」と思えることは、永江⁷⁾があげる介護継続に必要な「心理的ゆとり」につながるものであり、このような支援は精神的支援としても意味のあるものであると考えられる。精神的支援としては「話を聞いてくれる」ことが多くあげられた。これは、介護者の辛さを理解し、労うこと重要性を示唆している。

今回検討した介護者への支援は、「話を聞いてくれる」、「困ったときに」といった「ちょっとした配慮」ともいえるような内容であった。また、年齢からみると幼児から支援者になりうるし、関係性からは友人といった家族以外の者も支援者としてあげられていた。このことから介護者をとりまく誰もが、特別な技術を持っていなくても、介護者を思う気持ちがあれば支援者になる可能性をもっているといえる。

看護者は、介護を家族全体で支えるものと捉え、介護者に対しては、支援者の存在と支援を意識できるような働きかけが必要である。また、支援者に対しても支援者の行い支援とその効果について認識できるような働きかけをしていくことが重要になると思われる。その一方法として、渡辺ら⁸⁾が介護の分散化促進の影響要因の一つにあげる「コミュニケーション」(感謝の気持ちを伝え合う、介護の要請をすること)を促すことが考えられる。

高齢者の介護問題は今後も大きな課題になるものと考えられる。家族が全く関与しない介護というものは考えにくい。そのなかで家族の一部の人間に負担を負わせるのではなく、皆で支える介護を考えていきたい。

今回は介護者をとりまく支援者の実態を把握し、支援の可能性を示唆するにとどまる。また、限定された地域の少数での検討であるため、今後さらに、支援の実際について調査をひろげ、介護の負担感や受けとめ方への影響についても検討する必要がある。

要 約

在宅で高齢の要介護者の介護を行っている人62名を対象に、介護者からみた支援者とその支援の内容について調査した。

介護者は要介護者を除く平均2.3±1.6人の家族と同居していた。要介護者を除く家族全員で介護している世帯は51.9%であった。要介護者を除く家族全員が精神的支援になるとするものは69.0%であった。介護者は女性が多いといわれるが、家族内での支援者として夫をあげるものが25例あった。また、小学生程度の年齢の子供も支援者としてあげられていた。したがって性別、年齢を問わず、介護者を支えることが可能であり、介護者として活用することの重要性が示唆された。

同居家族以外では友人・知人の支援があげられ、精神的支援を受けているとするものが多かった。精神的支援の内容では「話を聞いてくれる」とするものが多く、精神的支援の重要性の再確認と、家族以外にも支援者を拡大できる可能性が考えられた。

おわりに、本研究を進めるにあたり、アンケート調査に御協力いただきました老人保健施設あわしまデイ

ケアセンターの皆様、訪問看護ステーションひこなの皆様に深謝致します。

文 献

- 1) 岡本祐三、高齢者医療と福祉、p.27、岩波新書、1996.
- 2) WAC監、長寿社会年鑑1998-1999、1998.
- 3) 春日キスヨ、介護とジェンダー、家族社、p.175-212、1997.
- 4) 渡辺裕子、鈴木和子、千葉大学看護学部紀要、15、149-154、1993.
- 5) 上野雅和、老親をめぐる諸問題、p.16-27、谷口知平先生追悼論文集1、家族法、信山社、1992.
- 6) 鈴木久美子、看護職員等研究報告、5、24-28、1997.
- 7) 永江美千代、金塚明子、佐藤弘美、黒田久美子、正木治恵、野口美和子、小林さゆり、日本看護学会第25回老人看護、150-153、1994.
- 8) 渡辺裕子、鈴木和子、千葉大学看護学部紀要、15、149-154、1993.

Summary

The subjects were 62 caregivers who care for elderly persons in their homes. The contents of this questionnaire focused on 1) Who were the helpers for the caregiver, and 2) What kind of help was given by the helpers.

Fifty one percent of the subjects care for all family members and 69.0% of the subjects felt that all members of their family help them. Generally caregivers are women, but 25 caregivers revealed that their husbands were helpers. Also elementary school aged children were seen as helpers. It was said that all family members could be helpers regardless of age or sex.

Friends and acquaintances were seen as helpers as well. The caregivers felt their friends and acquaintances mostly gave them mental support. As for the type of mental support, the most common answer was "Listening to me". The importance of mental support and who, besides family members, are possible supportive caregivers was noted.